（5 月　30 日）「創世記 37：25～27」

それより、あのイシュマエル人に売ろうではないか。弟に手をかけるのはよそう。あれだって、肉親の弟だから。

（創世記 37 章 27 節）

・ヨセフを穴に投げ入れた兄たちは、食事を始めました。彼らはどんな思いで、食事をしていたのでしょうか。これで鬱陶しい弟を見なくて済むと。喜んでいたのでしょうか。ヨセフの叫び声は。彼らの耳には聞こえなかったのでしょうか。

・そのとき彼らの目に、イシュマエル人の隊商が飛び込んできます。彼らはエジプトに向かう途中でした。彼らは当初、ヨセフを穴に入れたまま立ち去ろうとしていました。直接手は下さないものの、ヨセフの死は確実でした。

・しかしそれよりも、ヨセフを売ってしまおうと 4 番目の子ユダが提案します。お金のためというよりも、やはり後ろめたさがあったのでしょう。兄弟たちもこの提案を受け入れることにします。

（5 月　31 日）「創世記 37：28～36」

父は、それを調べて言った。「あの子の着物だ。野獣に食われたのだ。ああ、ヨセフはかみ裂かれてしまったのだ。」

（創世記 37 章 33 節）

・ヨセフはイシュマエル人に、銀 20 シェケル（約 228g）で売られます。どうせ殺そうとしていたのだから、いくらでも構わないと考えていてもおかしくありません。ちなみにイエス様は、銀貨 30 枚で裏切られました。

・ヨセフが売られるときに、ルベンはその場にいなかったようです。彼は穴の中にヨセフがいないのを見て、衣服を引き裂いて悲しみました。そのとき他の兄弟はルベンに、事のいきさつを説明したのでしょうか。

・ヨセフを失った父ヤコブの悲しみは、大変大きかったようです。彼は息子や娘の慰めも拒みます。ただ原因の一端が自分にあることも、気づいてほしいところです。ヨセフはエジプトのポティファルに売り渡されました。

2023 年 5 月

創世記・出エジプト記　　通　読

5 月

（5 月　1 日）「創世記 31：1～13」

ヤコブは、ラバンの息子たちが、「ヤコブは我々の父のものを全部奪ってしまった。父のものをごまかして、あの富を築き上げたのだ」と言っているのを耳にした。

（創世記 31 章 1 節）

・結婚式でよく読まれる聖書の中に、このような箇所があります。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。（コリントの信徒への手紙 13 章 4 節）」

・ところがわたしたち人間は、すぐに様々なことに対しねたみます。自分より裕福な人がいたらねたみ、自分にはない才能を持っている人がいたらねたむ。ラバンも財産を増やしていくヤコブをねたみます。そしてその背後にある神さまの祝福をもねたむのです。

・その状況をみて、神さまはヤコブに「生まれ故郷に帰りなさい」と命じます。神さまはラバンのねたみも、ラバンがヤコブに対しておこなってきた仕打ちも知っていたからです。困難の前から去りなさいという神さまの言葉に、愛を感じることができます。

（5 月　2 日）「創世記 31：14～21」

そのとき、ラバンは羊の毛を刈りに出かけていたので、ラケルは父の家の守り神の像を盗んだ。（創世記 31 章 19 節）

・ヤコブがレアとラケルに神さまの使いの言葉を伝えると、二人は父の元から自分たちの財産と一緒に出発することに合意しました。父ラバンがヤコブに対しておこなってきた仕打ちを、聞かされていたのでしょうか。
・昨日と今日の箇所の小見出しは、「ヤコブの脱走（新しい聖書ではヤコブの逃走)」となっています。あまり響きのよい言葉ではありません。しかし話し合いで解決する段階は過ぎてしまったのでしょう。そのときは、「逃走」すればよいのです。
・ただラケルの「父の家の守り神の像（テラフィム)」を盗んだという行為はいただけません。テラフィムは祖先崇拝をおこなうための偶像です。ラケルはどうしてこのようなことをしたのでしょうか。純粋に「わたしたちを守って欲しい」という思いでしょうか。

（5 月　3 日）「創世記 31：22～32」

ラバンはヤコブに言った。「一体何ということをしたのか。わたしを欺き、しかも娘たちを戦争の捕虜のように駆り立てて行くとは。」（創世記 31 章 26 節）

・ヤコブたちが逃げたことを知って、ラバンは急いで追いかけます。それはヤコブが逃亡してから三日目のことです。ラバンは怒りに震えていたのでしょう。七日目に追いつきます。すごい執念です。
・ラバンはきっと手荒なことをしてでも、娘や孫や財産を取り戻したかったのでしょう。しかしそれを見越した神さまは、ラバンに夢の中で釘を刺します。
・ラバンが血相を変えて追跡したことには、もう一つ理由がありました。それは「わたしの守り神（テラフィム)」が無くなっていたからです。彼は財産だけでなく「神々の守り」までも奪うのか！とヤコブに対して怒りをぶつけるのです。

（5 月 28 日）「創世記 37：5～11」

ヨセフはまた別の夢を見て、それを兄たちに話した。「わたしはまた夢を見ました。太陽と月と十一の星がわたしにひれ伏しているのです。」（創世記 37 章 9 節）

・ヨセフは二つの夢を見ます。一つは兄たちの麦の束が、自分の麦の束の周りに集まってひれ伏すというもの。そしてもう一つは、太陽と月と 11 の星が自分に対してひれ伏すというものでした。
・一つ目の夢を兄弟に話したときは、「兄さんたちの束」とはっきり言ったこともあり、兄たちは激怒し、ヨセフを憎むようになりました。さらに二つ目の夢には兄弟だけではなく父と母を示す太陽と月が登場します。
・さすがに二つ目の夢を話すヨセフを、父イスラエルはとがめました。父や兄がひれ伏すということは、当時の社会においてあってはならないことだったのです。兄弟はますますヨセフを妬むようになります。

（5 月 29 日）「創世記 37：12～24」

ルベンはこれを聞いて、ヨセフを彼らの手から助け出そうとして、言った。「命まで取るのはよそう。」（創世記 37 章 21 節）

・ヨセフの兄たちは、父の羊の群れを飼うためにシェケムへ出かけていました。当時 17 歳だったヨセフは、彼らとは一緒ではありませんでした。多分ヨセフの弟ベニヤミンも、留守番をしていたことでしょう。
・父はヨセフに対して、兄たちの様子を見てくるように告げます。この辺りも父の鈍感なところです。ただでさえヨセフは妬まれているのに、仕事もしないで様子だけ見に来られたら、兄たちの怒りは倍増するかもと、どうして考えなかったのでしょう。
・案の定、兄たちはヨセフを殺そうとしました。しかし長男ルベンは、「殺すのはよそう」と提案します。長子の意見は尊重されるべきものです。また兄たちも、心のどこかで直接手を下すことを、躊躇していたのかもしれません。

（5 月 26 日）「創世記 36：31～43」

イスラエルの人々を治める王がまだいなかった時代に、エドム地方を治めていた王たちは次のとおりである。

（創世記 36 章 31 節）

・イスラエル王国は紀元前 11 世紀に成立しました。初代の王はサウル、ダビデは二代目の王でした。彼らは油注がれた者として、聖別されます。つまり「神さまに選ばれた者」という意味が強くあります。
・ここで「イスラエルの人々を治める王がまだいなかった時代に」とわざわざ書かれているところを見ると、エドムの王たちは「神によって」立てられた者ではないということを強調しているようにも思えます。
・聖書を読んでいる人たちにとって、エドム人は敵対する民族でした。彼らは「赤いもの」欲しさに長子の権利を軽んじ、ヤコブとの祝福争いに敗れた愚かな人物、エサウの子孫なのだと聖書は繰り返し語るのです。

（5 月 27 日）「創世記 37：1～4」

兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。

（創世記 37 章 4 節）

・今日から物語の主人公はヨセフとなります。ヨセフはヤコブの 12 番目の子ども（女の子がディナ一人であったなら）でした。ヨセフの下には、ベンヤミンという弟もいました。
・イスラエル（ヤコブ）がヨセフを溺愛した理由を、「年を取ってからの子だったから」と聖書は書きます。しかしベニヤミンの方がもっと後の子です。イスラエルはレアよりもラケルを愛していました。そのことも影響していたのかもしれません。
・ヨセフは「兄たちのことを父に告げ口した（新しい聖書では『兄弟の悪い噂を父に告げることがあった』）」とあり、あまりよい性格とは言えないようです。もしくは正義感が強かったのでしょうか。ともかく父に贔屓されているヨセフを、兄弟は良く思いませんでした。

（5 月 4 日）「創世記 31：33～42」

ヤコブは怒ってラバンを責め、言い返した。「わたしに何の背反、何の罪があって、わたしの後を追って来られたのですか。」

（創世記 31 章 36 節）

・「知らない」ということは、恐ろしいことです。ヤコブはラケルがテラフィムを盗んでいたことを知りませんでした。もし知っていたら、このときヤコブはどのような対応をしていたでしょうか。
・ラケルはラバンに「自分は月のものがあるので立てません」と言い、危機を脱します。血は汚れているとされていたので、ラバンは彼女が座っているところに近づけなかったのです。
・ラケルの言葉の真偽はわかりません。しかし彼女が窮地を乗り切ったことで、ラバンとヤコブの力関係が一変しました。ヤコブはラバンを責めたてます。本当に、知らないということは恐ろしいことです。

（5 月 5 日）「創世記 31：43～50」

そこはまた、ミツパ（見張り所）とも呼ばれた。「我々が互いに離れているときも、主がお前とわたしの間を見張ってくださるように。」

（創世記 31 章 49 節）

・「この娘たちはわたしの娘だ。この孫たちもわたしの孫だ。この家畜の群れもわたしの群れ、いや、お前の目の前にあるものはみなわたしのものだ」というラバンの言葉を、ヤコブはどのような思いで聞いていたのでしょうか。
・確かに当時、すべての財産は家長のものでした。家長が亡くならない限り、財産が子どもに渡ることはありません。（ですからルカ福音書の「放蕩息子」が父親に財産を分けてくれと言ったことは、当時ではありえないことでした。）
・ラバンはヤコブとの間で契約を立て、ヤコブを去らせることを決意します。これ以上自分の主張を通そうとしても無駄だと思ったのでしょうか。それともヤコブと共にいる神さまに恐れをなしたのでしょうか。

（5 月　6 日）「創世記 31：51～54」

どうか、アブラハムの神とナホルの神、彼らの先祖の神が我々の間を正しく裁いてくださいますように。

（創世記 31 章 53 節）

・ラバンは契約に際して、石塚と柱を設けます。お互いにその石塚を超えないというのが、このときの契約です。それは娘や孫たちに今後一切会えなくなることを意味していましたが、ラバンはそれでよかったのでしょうか。
・ラバンは「アブラハムの神とナホルの神」の名を呼びます。アブラハムはヤコブのおじいさん、ナホルはヤコブの母リベカのおじいさんです。ヤコブの神は「アブラハムの神、イサクの神」だったでしょう。
・そしてラバンの神は、「ナホルの神、ベトエルの神」でした。それを同じ神として考えていたのかどうかはわかりません。ただここで言えることは、お互いの信仰を立てながら、契約が結ばれたということです。

（5 月　7 日）「創世記 32：1～3」

ヤコブは彼らを見たとき、「ここは神の陣営だ」と言い、その場所をマハナイム（二組の陣営）と名付けた。

（創世記 32 章 3 節）

・ラバンとヤコブは契約を交わした後、一緒に食事をし、山で夜を過ごします。契約が結ばれたので、これから先二人は会うことがないでしょう。ラバンは娘や孫にも会えなくなります。一晩、どのような会話がなされたのでしょうか。
・ラバンは自分が住んでいる場所に帰って行きました。ヤコブはこれから、生まれ故郷に向かって旅をしていきます。すでに故郷を離れて、20 年が経過していました。様々な思いが、ヤコブの胸の中に湧いてきたことでしょう。
・旅の途中、突然神の御使いたちが現れました。ヤコブはエサウの前から逃亡したとき、神の御使いたちが先端が天まで達する階段を上り下りする夢を見ました。再び神の御使いたちを見て、ヤコブの心にそのときの記憶がよみがえってきたのかもしれません。

（5 月 24 日）「創世記 36：9～19」

セイルの山地に住む、エドム人の先祖エサウの系図は次のとおりである。

（創世記 36 章 9 節）

・エサウの系図が続きます。26 章 34 節には、「エサウは、四十歳のときヘト人ベエリの娘ユディトとヘト人エロンの娘バセマトを妻として迎えた」と書かれていました。
・さらに 28 章 9 節には、「イシュマエルのところへ行き、既にいる妻のほかにもう一人、アブラハムの息子イシュマエルの娘で、ネバヨトの妹に当たるマハラトを妻とした」とあります。今回の箇所ではユディトがアダに、マハラトがバセマト（4 節）に変わっています。
・これは、様々な伝承（資料）を使って聖書が編集されたという証明にもなります。イスラエルとヤコブという名が混在していたり、系図の名が違っていたり、そのようなことが聖書の中には存在するのです。

（5 月 25 日）「創世記 36：20～30」

ツィブオンの息子たちは、アヤとアナである。アナは父ツィブオンのろばを飼っていたとき、荒れ野で泉を発見した人である。

（創世記 36 章 24 節）

・神学生のとき、毎日朝夕の礼拝を欠かさずおこなっていました。そのときに読まれる聖書は、ほぼすべての箇所が網羅されていました。つまり今日のような箇所も、読まれることがありました。
・眠たい目をこすりながら、朝、カタカナの知らない名前が続くのは正直辛かったです（すいません）。知っている名前が少しでも登場したら、少しは違っていたのだと思いますが。
・その中に一人だけ、特徴的なことが書かれた人がいます。アナです。彼は荒れ野で泉を発見したそうです。水が貴重だったこの地域において泉を発見するということは、後代まで名を残すほどの素晴らしいことだったのでしょう。

（5 月 22 日）「創世記 35：23～29」

イサクは息を引き取り、高齢のうちに満ち足りて死に、先祖の列に加えられた。息子のエサウとヤコブが彼を葬った。　（創世記 35 章 29 節）

・この箇所にはヤコブの息子たちが列記されています。レアの子が 6 人、ラケルの子が 2 人、ラケルの召し使いビルハの子が 2 人、レアの召し使いジルパの子が 2 人です。長男のルベンはラケルが亡くなった後、ビルハと寝ました。何だかドロドロしています。
・20 年前、ヤコブがエサウから祝福を奪ったとき、エサウは心の中でこのように思いました。「父の喪の日も遠くない。そのときがきたら、必ず弟のヤコブを殺してやる（創世記 27 章 41 節）」。しかしその後もイサクは生きていたようです。
・そしてイサクは 180 年の生涯を終えました。イサクにとって、ヤコブが出ていった後の 20 年は辛かったことでしょう。しかしエサウとヤコブが和解し、二人で自分を葬ってくれたということは、彼にとっては喜びだったのではないでしょうか。

（5 月 23 日）「創世記 36：1～8」

エサウはこうして、セイルの山地に住むようになった。エサウとはエドムのことである。　（創世記 36 章 8 節）

・創世記 25 章 27 節以下に、エサウがヤコブに長子の権利を譲る場面がありました。そのときエサウは、「お願いだ、その赤いもの（アドム）、そこの赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきっているんだ」とヤコブに願いました。
・その「赤いもの（アドム）」という言葉から、彼はエドムとも呼ばれたと聖書は説明しています。このようにして、エドム人の祖先はエサウであると聖書は描いているのです。
・エドム人は、古代パレスチナに居住したセム系民族で、偶像崇拝をしていました。そのためユダ王国としばしば争い、また神さまの怒りを買っていたという記述もあります。もともと兄弟民族であったのに、悲しいことです。

（5 月 8 日）「創世記 32：4～13」

ヤコブは非常に恐れ、思い悩んだ末、連れている人々を、羊、牛、らくだなどと共に二組に分けた。　（創世記 32 章 8 節）

・神の御使いたちを見たヤコブは、20 年前に自分がエサウに対しておこなったことを思い出したのかもしれません。彼は父イサクをだまし、エサウに与えられるはずだった祝福を奪っていました。
・そのときエサウは怒り狂い、父イサクが亡くなったときにヤコブを殺そうと決意していました。生まれ故郷に帰るということは、兄エサウが住んでいる場所の近くに戻るということを意味します。ヤコブはそこで、先に使いを出すことにします。
・するとその知らせを聞いたエサウは、400 人を引き連れてヤコブの元に向かいます。自宅でヤコブを待つのでも、従者数人を従えて向かうのでもありません。400 人を引き連れてくるのです。ヤコブは恐れ、策を講じ、神さまに祈ります。

（5 月 9 日）「創世記 32：14～22」

『あなたさまの僕ヤコブも後から参ります』と言いなさい。」ヤコブは、贈り物を先に行かせて兄をなだめ、その後で顔を合わせれば、恐らく快く迎えてくれるだろうと思ったのである。　（創世記 32 章 21 節）

・ヤコブの策は、まず一族、羊と牛、らくだを二組に分けるというものでした。もしエサウが襲ってきても一組は無事だろうということです。そしてもう一つは、群れと群れの間には距離を置き、それぞれの僕にこのように言わせるということです。
・「これは、あなたさまの僕ヤコブのもので、御主人のエサウさまに差し上げる贈り物でございます。ヤコブも後から参ります」。エサウは群れに出会うたびに、この言葉を聞くのです。
・これが吉と出るか凶と出るか、策士策に溺れるという言葉がありますが、ヤコブの運命やいかに。ただみんなを先に行かせて自分は安全なしんがりを進むヤコブの姿は、あまり好きにはなれません。

（5 月 10 日）「創世記 32：23～33」

その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」 （創世記 32 章 29 節）

・「ヤボクの渡し」の箇所を読むたびに、「矢切の渡し（細川たかし）」を口ずさんでしまうのは、わたしだけでしょうか。ヤコブは夜中に妻とその従者、子どもたちを引き連れて、ヤボクの渡しを渡らせます。しかしヤコブだけは後に残りました。

・そこで突然、格闘が起こります。どういう経緯でそうなったのかは不明です。ヤコブは腿の関節を外されますが、格闘した相手から祝福を受けます。その相手は、神さまでした。

・この場面は、ヤコブの祈りだと解釈されることがあります。夜中じゅう祈り、必死になって神さまからの祝福を求めるヤコブの姿こそ、わたしたちが目指すべき祈りの姿勢だというのです。関節が外れるほどの激しい祈り、想像してみましょう。

（5 月 11 日）「創世記 33：1～4」

エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた。 （創世記 33 章 4 節）

・ついにヤコブがエサウと再会する日が来ました。20 年ぶりのことです。しかしヤコブは、気が気ではありませんでした。エサウが自分に騙されたことをまだ根に持っていて、自分を殺そうとしていたらどうしよう、そのことばかりが気になったようです。

・そこでヤコブは、自分の子どもたちをその母親ごとに振り分けます。ヤコブには二人の妻レアとラケルがいました。さらに二人の妻の召し使いたちにもそれぞれ子どもがいました。ヤコブは召し使いとその子たちを先に行かせ、次にレアと子ども、最後にラケルと子どもを行かせます。

・自分の大切な者を後ろに回し、殺されることがないようにしたのです。召し使いやその子たちは、そういうことも受け入れなければならなかったのです。しかしエサウは、ヤコブを泣きながら迎え入れました。

（5 月 20 日）「創世記 35：9～15」

神は彼に言われた。「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名はもはやヤコブと呼ばれない。イスラエルがあなたの名となる。」神はこうして、彼をイスラエルと名付けられた。 （創世記 35 章 10 節）

・創世記 32 章ヤコブは神さまと格闘しました。その 29 節では「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる」と告げられていました。

・今日の箇所でも、神さまはヤコブに「イスラエルがあなたの名となる」と告げます。イスラエル民族がヤコブから、そして 12 人の息子たちから生まれていくのです。（このときはまだベニヤミンは生まれていませんが）。

・このように神さまに改名された例として、アブラハム（旧アブラム）とサラ（旧サライ）がいます。彼らのときは聖書の記述もすべて変わっていきましたが、イスラエルの場合はこれ以降もヤコブと呼ばれる箇所が多く見られます。様々な伝承が混ざっているのでしょうか。

（5 月 21 日）「創世記 35：16～22」

ラケルが最後の息を引き取ろうとするとき、その子をベン・オニ（わたしの苦しみの子）と名付けたが、父はこれをベニヤミン（幸いの子）と呼んだ。 （創世記 35 章 18 節）

・ヨセフの母であるラケルが二人目の子を授かります。ラケルはなかなか子どもが与えられなかったので、ヨセフを生む前には夫ヤコブに文句を言ったこともありました。しかし今回は特別な物語は書かれていません。

・今回の出産は、難産でした。助産婦はラケルに、「心配ありません。今度も男の子ですよ」と言ったようですが、それよりも母体の心配をして欲しいところです。難産のため命を失うことになったラケルは、子どもの名をベン・オニ（苦しみの子）と名付けます。

・しかしヤコブは、その子の名をベンヤミン（幸いの子）と変えます。子どもにとっては良い変更のように思えます。最後の二節では、長子ルベンがイスラエル（ヤコブ）の側女ビルハと寝たことが報告されます。このことは、後に影響を及ぼします。

（5 月 12 日）「創世記 33：5～7」
次に、レアが子供たちと共に進み出てひれ伏し、最後に、ヨセフとラケルが進み出てひれ伏した。
（創世記 33 章 7 節）

・感動の再開を果たしたヤコブとエサウ、ヤコブの逃亡からすでに 20 年が経過していたとはいえ、エサウは心からヤコブを許していたのでしょうか。ヤコブが逃げ出した時、エサウは少なくとも 40 歳を超えていました。
・ということは、ヤコブが会いに来たとき、エサウはすでに 60 歳を過ぎていたわけです。しかし 60 歳になれば誰もが人間的に丸くなり、何でも許せるかというとそうではありません。周りを見たら、よくわかります。
・そのこともあってか、ヤコブは慎重にことを運びます。「あなたの僕であるわたしに」というヤコブの言葉は少しこそばゆいものですが、エサウは決して悪い気はしなかったでしょう。また、ヤコブから敵対心も感じられなかったと思います。

（5 月 13 日）「創世記 33：8～11」
「どうか、持参しました贈り物をお納めください。神がわたしに恵みをお与えになったので、わたしは何でも持っていますから。」ヤコブがしきりに勧めたので、エサウは受け取った。
（創世記 33 章 11 節）

・「本音」と「建て前」、なかなかわからないものです。京都に住んでいるときは、大変苦労をしました。ヤコブのどこまでもへりくだった態度は、慇懃無礼（いんぎんぶれい）のようにも感じます。
・ヤコブはエサウとの争いを避けるために、精一杯の贈り物をささげたのでしょう。ただ「兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます」という言い方は、いかにもわざとらしく聞こえてしまいます。
・とにかく、エサウはヤコブがしきりに勧めたので、ヤコブの贈り物を受け取りました。これはヤコブのことを受け入れるということにもなります。20 年の歳月を経て、ようやく二人の兄弟の和睦が結ばれました。

（5 月 18 日）「創世記 34：25～31」
二人はこう言い返した。「わたしたちの妹が娼婦のように扱われてもかまわないのですか。」
（創世記 34 章 31 節）

・旧約聖書を読んでいて辛くなるのは、こういう箇所です。確かにディナが一方的に汚された、これは事実です。しかしだからといって、「正義を盾に」すべてを滅ぼし、略奪するのはどうなのでしょうか。
・「目には目を」という定めがあります。これはどれだけでも復讐をしてよいという意味ではありません。復讐をするとしても被害を受けたのと同じだけ、あるいは損害に見合った対価を受け取ったらそれで終わりというものです。
・「正義を盾に」した「やりすぎ」は、さらなる争いを生むだけです。「自分は正しい」、「自分は被害者だ」と叫ぶ前に、シメオンとレビがおこなったことをもう一度見つめ直していきたいと思います。

（5 月 19 日）「創世記 35：1～8」
人々は、持っていた外国のすべての神々と、着けていた耳飾りをヤコブに渡したので、ヤコブはそれらをシケムの近くにある樫の木の下に埋めた。
（創世記 35 章 4 節）

・ヤコブはシメオンとレビがスコトの町を滅ぼし、略奪したのを知って恐れます。カナン人やペリジ人が彼らを憎み、襲って来るかもしれなかったからです。神さまはそんなヤコブを見て、その場を去るように言われました。
・神さまはヤコブに、ベテルに上って祭壇を造るようにと伝えます。合わせて、「身に着けている外国（異国）の神々を取り去り、身を清めて衣服を着替えなさい」と命じられます。そして神さまは周囲の町々を恐れさせ、ヤコブたちを守ります。
・そのころまだ、モーセは登場していないので十戒はありません。しかしここまで、「異国の神々」の偶像や飾りがあったことには、驚かされます。そういえばリベカが父ラバンの元から盗んできたテラフィムはどうなったのでしょうか。

（5 月 14 日）「創世記 33：12～20」

ヤコブはスコトへ行き、自分の家を建て、家畜の小屋を作った。そこで、その場所の名はスコト（小屋）と呼ばれている。 （創世記 33 章 17 節）

・ヤコブの帰還を受け入れたエサウは、2 点のことを提案します。それは、①一緒に旅をすること、②自分の従者を何人かヤコブのところに残しておくことでした。しかしヤコブはいずれの申し出も丁重に断ります。

・その断った理由は、実はヤコブはエサウの住むセイルに一緒に戻る気はなかったからでした。ヤコブはセイルとは違う場所に行き、そこに小屋（スコト）を建てました。そのためヤコブが行った場所は、スコトと呼ばれるようになります。

・エサウはまた騙されたということなのでしょうか。聖書には、エサウが怒ってヤコブを探し回ったという記載はありません。エサウもヤコブがついて来ないことは、薄々気づいていたのでしょう。そして離れて暮らす方が平和だということも、知っていたのかもしれません。

（5 月 15 日）「創世記 34：1～12」

ヤコブは、娘のディナが汚されたことを聞いたが、息子たちは家畜を連れて野に出ていたので、彼らが帰るまで黙っていた。 （創世記 34 章 5 節）

・聖書には、様々な人間の罪が書かれます。アダムとエバの偽証、カインとアベルの兄弟殺し、バベルの塔の傲慢などなど。そして今回は、ヤコブの娘ディナに対する強姦事件が報告されています。

・ヤコブにはこの時までに、11 人の息子と 1 人の娘をもうけたと聖書に書かれています。これは文字通りの人数ということではなく、この時代女性の地位がたいへん低く数に加えられなかったため、女性の名前は全員残されていなかった可能性も高いです。

・その中で名前が記されたディナ、しかし彼女は悲しい出来事を載せるために名を残されました。その事件の中でディナを襲ったシュケムの父ハモルは、ヤコブたちと親戚関係を結ぼうと提案します。こういうことが当たり前だった時代なのでしょうか。

（5 月 16 日）「創世記 34：13～19」

ただ、次の条件がかなえられれば、あなたたちに同意しましょう。それは、あなたたちの男性が皆、割礼を受けて我々と同じようになることです。 （創世記 34 章 15 節）

・「あなたたち、およびあなたの後に続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。包皮の部分を切り取りなさい。これが、わたしとあなたたちとの間の契約のしるしとなる。（創世記 17 章 10～11 節）」

・アブラムがアブラハムと呼ばれるようになったとき、神さまは自分とアブラハムの子孫との契約として上記の戒めを与えました。つまり割礼を受けることは、イスラエルの民（当時はまだそう呼ばれていませんが）に属することを意味していたのです。

・ヤコブの息子たちは、ディナを汚したシュケムとその父ハモルに、彼らの町の人と一緒にみな割礼を受けるように提案します。しかしこれは、ヤコブの息子たちが「だまして（新しい聖書では『たくらんで』）」おこなったことでした。

（5 月 17 日）「創世記 34：20～24」

そうすれば、彼らの家畜の群れも財産も動物もみな、我々のものになるではないか。それには、ただ彼らの条件に同意さえすれば、彼らは我々と一緒に住むことができるのだ。」 （創世記 34 章 23 節）

・シュケムの父ハモルは、スコトの町の人たちを説得します。彼の願いは、シュケムがディナを妻として迎えることの他に、ヤコブたちをその財産と一緒に自分たちの中に受け入れるというものでした。

・ただ割礼という行為が、アブラハムの神（ヤコブの神）と契約を交わすことだとは、はっきり伝えられていません。きっとスコトの町の人たちにも、自分たちが信仰する神々があったのではないでしょうか。そことの決別については、何も触れられていません。

・しかし、ハモルは町の有力者だったのでしょう。町の人たちはハモルの言うことを聞き入れます。そしてすべての男子が割礼を受けます。ヤコブが持つ財産が、よほど魅力的に映ったのでしょう。